

いじめ研究をめぐる二つの課題

センター客員教授（日本女子大学人間社会学部教授） 清 永 賢 二

今後のいじめにおける基礎研究として、以下の二点の研究推進の必要性が強調される。

1. いじめ現象の階層的研究

現実のいじめには、様々な形態がある。少数ではあるが極めて重大ないじめから、日常的に発生する軽微ないじめまで多種多様である。今後の「いじめへの臨床的対応」を考えた時、こうした多様ないじめをどの様に分類し仕分けするかが重要な課題となる。

様々な分類軸が検討され抽出されねばならない。一つの軸としては、「いじめの深刻さを表わす1つの指標」としてのいじめ被害の回復困難さを基にした「深さの軸」があげられる。

即ち、いじめからの圧力が非常に高く被害回復が極めて困難ないじめ(深層レベル)、逆に圧力が低く回復の容易ないじめ(表層レベル)、この上下のいじめの中間にさらに幾つかに仕分けされたいじめが配置され、いじめ世界を構成するというように理解する。状況によっては、この両極のいじめは、別な名称で表現されるべきものである。

西欧社会での「いじめ」表現は、こうした階層化した表現で種々ないじめ現象を表わしている。

例えば、1999年4月20日にアメリカのテンバーで発生した高等学校内での銃乱射事件の犯人である高校生に関し、日本では「いじめが背景にあった」と一言で「いじめ」報道がなされた。

しかし、たとえばイギリスでは、新聞を中心にした報道の中で、日常的に我々が使用する「いじめ=Bully」は全く使用されず、Persecutingと表現された。元の言葉であるPersecuteの主な意味は「harass with cruel or oppressive treatment」(WEBSTER, '98)であり、Bullyingは「to coerce by threats」と表わさる。Persecutingは、Bullyに比較し、被害者への虐待あるいは迫害的な意味が濃くなり、状況によってはいじめよりも脅迫ということが強調される。しかし、英和辞典(三省堂、'98)では、両者の訳は、この差が表現できないまま「いじめ」

と表わされている。

テンバー事件に関するイギリスの報道は、Persecutingを使うことによって、Bullyでは表わすことの出来ないいじめ「虐待行為」が乱射事件の加害少年たちになされていたのだ、ということ表現したのである。こうした表現を、日本では、「いじめ」としか報道されなかったことの問題性が強調されようし、その報道を「いじめ」として日本で聞いた人々がどのような感想を抱いたかが知りたいところである。

虐待は、その中に一部いじめ的要素を持つかもしれない。しかし、虐待は虐待であり、虐待は即ちいじめではない。

こうした境界を明確にしながら、今後のいじめ研究は進められる必要がある。そのためにも、いじめ現象を深さの視点から階層化し分類し、場合によっては新たな言葉を開発する基礎的研究のなされることが求められる。

2. 規範意識形成に関する基礎調査研究

いじめというスタイルを取らないが、小学校低学年からの学級崩壊現象が進行している。この現象は、明らかにいじめと共通する基本要素を根底に置いて誕生したものである。

即ち、今日のいじめは、子どもたちの間の人間関係を調整する規範意識の形成不全あるいはその欠落から生じている。一方、学級崩壊を呼び起こしている低年齢な子供たちの背景には、学級集団を形成しているという自覚の剥落、即ち、他者の存在があって自己を含めた集団が成立するという基本的な社会規範意識が形成されことなく成長して来た子どもたちの存在が在る。いずれも、子どもの規範意識の形成に関する問題である。

いじめや学級崩壊のみならず、今後も形を変えて規範意識の欠落あるいは形成不全を原因とする子ども問題が引き続き生じて来る可能性は多分にある。そうした状況の的確な分析と十分な対応策を提示するためにも、子ども間の規範意識の形成に関する基礎的調査研究の重要性が指摘される。